

目 次

はじめに	I
第 1 章 ヘイト・スピーチ規制論における 批判的人種理論	6
第 1 節 問題の所在	7
第 2 節 アメリカにおけるヘイト・スピーチ規制に関する判例	12
1 1940年代以前	13
2 1950年代～1960年代——Beauharnais 判決を中心に	15
3 1970年代——Skokie 事件を中心に	17
4 1980年代～1990年代——R.A.V. 判決を中心に	22
(1) キャンパス表現規制 (campus speech code) / (2) R.A.V. 判決	
5 2000年代以降——Black 判決を中心に	27
(1) Black 判決 / (2) R.A.V. 判決と Black 判決との関係——Thomas 裁判官の 影響 / (3) Black 判決以降	
6 小 括	41
第 3 節 批判的人種理論のヘイト・スピーチ規制論	43
1 批判的人種理論におけるヘイト・スピーチ規制の位置付け	43
2 批判的人種理論の論者が主張するヘイト・スピーチの害悪	45
(1) 精神的害悪および肉体的害悪 / (2) 思想の自由市場への影響 / (3) 平等 保護の侵害	
3 批判的人種理論における無自覚性の観点	48
第 4 節 本章のまとめ——日本への示唆	54
第 2 章 ヘイト・クライム規制をめぐる 憲法上の諸問題	59
第 1 節 問題の所在	60

第2節	概説	63
第3節	判例	66
	1 Mitchell判決	66
	(1) 事実／(2) Rehnquist首席裁判官による法廷意見(全員一致)	
	2 Shepard-Byrd法の合憲性	70
	(1) Glenn判決／(2) Hatch判決／(3) Cannon判決	
	3 小括	72
第4節	憲法上の問題——思想の自由を中心に	73
	1 R.A.V.判決との整合性——表現／行為区分論は成り立ちうるか	73
	2 ヘイト・クライム法と思想の自由	77
	(1) 違憲説／(2) 合憲説	
	3 検討	83
第5節	本章のまとめ——日本への示唆	87

第3章 批判的人種理論 (Critical Race Theory) の含意

..... 90

第1節	問題の所在	91
第2節	批判的人種理論の歴史	95
	1 批判的人種理論の理論的起源	95
	(1) 公民権運動／(2) 批判的法学研究／(3) フェミニズム	
	2 批判的人種理論の生成・発展	100
	(1) 1989年以前／(2) 1989年以降／(3) 近年の動向	
第3節	理論の展開	110
	1 これまでの理論	110
	(1) リベラリズム批判／(2) ナラティブの手法／(3) 「差別的意図の要求」批判／(4) 批判的白人研究	
	2 2001年以降の理論動向	126
	(1) 議論の発端——Lawrence論文に対する批判／(2) 観念主義的アプローチと物質主義的アプローチとの接合の可能性	
	3 批判的人種リアリズム	133

第4節	本章のまとめ	136
-----	--------	-----

第4章 連邦最高裁と表現の自由——アメリカの「特殊性」 138

第1節	問題の所在	138
-----	-------	-----

第2節	表現の自由の歴史	140
-----	----------	-----

- | | | |
|---|-----------------------|-----|
| 1 | 概観 | 140 |
| 2 | ヨーロッパとアメリカの表現規制をめぐる歴史 | 142 |

第3節	ロバーツ・コートと表現の自由	144
-----	----------------	-----

- | | | | | |
|-----|----------------------------------|-------------------|-------------------|---|
| 1 | 概観 | 144 | | |
| (1) | 2005-2006開延期 | ／(2) 2006-2007開延期 | ／(3) 2007-2008開延期 | ／ |
| (4) | 2008-2009開延期 | ／(5) 2009-2010開延期 | ／(6) 2010-2011開延期 | ／ |
| (7) | 2011-2012開延期 | ／(8) 2012-2013開延期 | ／(9) 2013-2014開延期 | |
| 2 | 若干の考察 | 150 | | |
| 3 | アメリカの「特殊性」——“Free Speech Court”? | 155 | | |

第4節	本章のまとめ	156
-----	--------	-----

第5章 ヘイト・スピーチ規制論と 表現の自由の原理論 159

第1節	問題の所在	159
-----	-------	-----

第2節	アメリカにおける表現の自由の原理論	161
-----	-------------------	-----

- | | | |
|---|----------|-----|
| 1 | 思想の自由市場論 | 161 |
| 2 | 自己統治の理論 | 163 |
| 3 | 本章の枠組 | 165 |

第3節	ヘイト・スピーチ規制に消極的な議論	167
-----	-------------------	-----

- | | | |
|---|-------------------|-----|
| 1 | C. Edwin Bakerの議論 | 167 |
| 2 | Robert C. Postの議論 | 170 |

第4節	ヘイト・スピーチ規制に積極的な議論	175
-----	-------------------	-----

- | | | |
|---|---------------------|-----|
| 1 | Steven J. Heymanの議論 | 175 |
| 2 | Alexander Tsesisの議論 | 179 |

第5節 どちらの価値が優先されるか 182

1 自律理論 182

(1) C. Edwin Bakerの議論／(2) Seana Valentine Shiffrinの議論／(3) Susan Williamsの議論

2 若干の検討 192

3 民主政への参加とヘイト・スピーチ 198

(1) ヘイト・スピーチ規制法と政治的正統性／(2) ヘイト・スピーチと人間の尊厳

第6節 本章のまとめ 206

終章 日本の現状と課題 210

第1節 本書の視点 210

第2節 日本の現状と問題点 212

1 現行の法制度とその限界 212

(1) 現行の法制度／(2) 現行の法制度の限界——京都朝鮮学校事件を参考に

2 ヘイト・スピーチ解消法とその問題点 218

(1) ヘイト・スピーチの定義／(2) その他の問題点

3 政府言論としてのヘイト・スピーチ解消法 221

第3節 今後の課題と展望 224

あとがき

初出一覧

索引